# 思春期精神遅滞児の親子関係

岩田　崇（慶応義塾大学）
秋山泰子（　〃　）
吉田　勝（　〃　）
白川佳代子（　〃　）
黒川由美子（　〃　）
井上義朗（東京学芸大学）
深谷和子（　〃　）
近藤俊之（厚生省保険局医事課）

## 研究目的

精神遅滞児が思春期を迎えた時期に母親の言葉として，「小さい頃も大変だったが，大きくなってくると益々大変になってきた」「行く末がおそろしくて将来のことなど考えられない」「こういう子供にも思春期なんてあるんでしょうか」などということをしばしば聞く。

このような断片的な言葉の背景に共通的な大きな問題がひそんでいることがうかがわれる。

今回はそれを少しでも明らかにする目的で調査を行った。

## 調査方法並びに対象

知能指数50未満で養護学校に通学させている子供をもつ親にアンケート調査を行った。子供の年齢は12歳から20歳迄で，性別は男子78名，女子37名，計115名である（表1）。

調査内容は，(1)子供の思春期を迎えた親の気持。(2)子供の成長の楽しみについて。(3)大人になることの期待感について。(4)子供の思春期相当の精神発達情況について。(5)子供の進路について。(6)子供の結婚について。(10)将来誰が子供の面倒をみるかについて考えていることの7項目である。

## 調査結果

(1)子供の思春期を迎えた親の気持

無答9名，何とも思わなかった7名（この中には当然，自然と思ったことを附記した3名がある）の他，99名が以下の項目に記入していた。即ち，

| | |
|---|---|
| 心配になった | 71名 |
| 嬉しかった | 23名 |
| 嫌だと思った | 13名 |
| 驚いた | 12名 |

であった。一人で2項目以上に記入していることがあるので総計は実人数を超えている。このうち，最も多い心配になったとの答のうち，単独で心配を記入したものが48名で，その他は嬉しかったと共にが10名，嫌だったと共にが7名，驚いたと共にが3名，嬉しさと驚き，嫌，心配と複雑な心情の記入3名であった。

(2)成長の楽しみについて

成長の楽しみ，大いにある67名，少しある46名との陽性の答103名に対し，大いになし3名，少しなし5名，計8名の陰性な答があった。

(3)大人になってほしいといつも思いますか

との問いに，いつも思う57名，時々思う43名計100名，いつも思わぬ6名，時々思わぬ10名で，思わぬ方の16名，ことにうち6名は深刻である。

(4)思春期相当の子供の精神発達情況の質問に対して無答1，変化なしと答えたもの14名であった。この他の100名については以下の答えがあった。

| | |
|---|---|
| 男，女らしくなった | 67名 |
| 頼もしくなった | 43名 |
| いうことをきかなくなった | 43名 |
| 異性に関心をもつようになった | 42名 |
| 友達との結びつきを求めるようになった | 42名 |
| おしゃれになった | 30名 |
| かくしごとをするようになった | 16名 |

以上の答の数は一人で多項目にわたるので，実人

数を超えている。

これらの答の中で，かくしごとをするようになったという項目に相当する子供が殊に少ない。

精薄児には親の目がゆきとどいている，またとどかざるを得ない親子関係にあることが示唆されている。また，おしゃれも親の援助が必要であるが，親がとてもそこまで気が廻らない，そのようなゆとりがないという現実があることが見逃せない。

(5)進路について

養護学校卒業迄の進路についての考えでは次のような答が得られた。

| | | |
|---|---|---|
| 福祉作業所 | 41名 | 36％ |
| 理解ある一般企業 | 35名 | 30％ |
| 施　設 | 16名 | 16％ |
| 生活訓練所 | 16名 | 14％ |
| 在　宅 | 7名 | 6％ |

この比率は男女間に大差がなかった。

(6)結婚について

| | | |
|---|---|---|
| とても考えられない | 53名 | 46％ |
| 適当な人がいたらさせたい | 32名 | 28％ |
| どちらともいえない | 30名 | 26％ |

との答であった。この質問と答は，健常者についてはあり得ないことであって，精神遅滞児とその家族の心理的社会的ストレスの一要因を物語っている。

(7)子供を将来だれが面倒をみるかの予定についての考え方は以下のようであった。

| | | |
|---|---|---|
| 親 | 54名 | 47％ |
| 兄弟・親類 | 38名 | 33％ |
| 自立 | 10名 | 9％ |
| 施設長 | 7名 | 6％ |
| まだ考えていない | 6名 | 5％ |

家族で面倒みようと考えているのが80％に及んでいることに，わが国の社会福祉事情，家族制度の色彩の濃いことがうかがわれる。さらにこの設問と答の中から，健常者では，「将来子供に面倒をみてもらいますか」という問いかけとは正反対ともいえる情況が浮び上ってくることに，精神遅滞児の親子の関係の深渕を見る思いがするのである。

## 結　　語

以上，思春期を迎えた精神遅滞児の親子関係を研究するためのアンケート調査を行った結果を報告し，付随する心理社会的問題の一端にふれた。

今後調査を進め，現実との検討を行いたいと思う。

〔表Ⅰ〕

| 年　齢 | 男 | 女 | 計 |
|---|---|---|---|
| 12　才 | 1 | 0 | 1 |
| 13 | 8 | 4 | 12 |
| 14 | 10 | 1 | 11 |
| 15 | 5 | 4 | 9 |
| 16 | 18 | 11 | 29 |
| 17 | 19 | 5 | 24 |
| 18 | 13 | 7 | 20 |
| 19 | 2 | 5 | 7 |
| 20 | 2 | 0 | 2 |
| | 78 | 37 | 115名 |

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究目的

精神遅滞児が思春期を迎えた時期に母親の言葉として,「小さい頃も大変だったが,大きくなってくると益々大変になってきた」「行く末がおそろしくて将来のことなど考えられない」「こういう子供にも思春期なんてあるんでしょうか」などということをしばしば聞く。このような断片的な言葉の背景に共通的な大きな問題がひそんでいることがうかがわれる。今回はそれを少しでも明らかにする目的で調査を行った。